回顧録

ビオグラフ

璃菟樹の

あきついつき

れむれむ

[Illustration] トアケミカゲ

SPIRITED-ZERO

れむれむ

おはこんばんちはなら。来世は音楽室の壁になりたいれむれむです。今回のお話は、主人公の樹を始め『いくつもの名前（と顔）』を持つ女の子が、居場所と安心を求め戦う成長物語です。不器用でもカッコ良く生きる彼女たちの『情念』を見届けてください。

本作は100%百合（と友情）で書かれた小説です。

追伸：あとがきは今回も落とし……自重しました（代わりにアカネちゃん愛を増量しています）

トアケミカゲ

いつも職場の階段の踊り場で昼寝をしているのに、
連日の暑さでは転がることもままならない。
そんな時に見つけた新たなオアシス、
新たな昼寝ライフが今幕を開ける。
次回「インターネットカフェ」。500円で買える
刹那の休息が、社畜たちの心を取り戻す。

璃菟樹の回顧録（あきついつき　ビオグラフ）

れむれむ
Illustration／トアケミカゲ

SPIRITED-ZERO

目次

	プロローグ／月光	3
1	アタシがわたしだったころ	6
2	愛の夢（前）	43
3	愛の夢（後）	83
4	夜想曲（序）	115
5	以上、回想	155
5.5	Ｒｅ：愛の夢	194
6	クロコディルズ	202
	エピローグ／夜の音楽	250

プロローグ／月光

「私以外の女の子にならないで」

それはきっと、一生のお願いというもの。

本心本音の本気から溢れた望みだと、幼心にも察して頷くしかなかった——いや、頷きたかった。

左耳と右耳。左小指と右小指。

イヤフォンと指先を繋ぎ合いながら畦道（あぜみち）を歩く。

等間隔の電柱から首を傾げる蛍光灯とすれ違う度、隣の彼女を仰ぎ見た。

夏らしい白のワンピース。日焼けのない首筋。

私の視線に気付いては律儀に微笑み返す。

宵闇の中、彼女は淡い光の粒子を纏う。それが、何か人ではない神聖な存在に映って。実際、天使の類いではないだろうかなんて考えたりもする。

嘘ではなく、生まれた時から彼女が大好きだった。

世界で一番尊敬している、親愛なる私の相棒。この世でそう言えるたった一人の相手。

幾分歳は離れていた。連れ添って歩くと、しばしば親子に間違えられもした。けれど、実年齢より上に見られて苦笑する、その破顔には未だ少女が宿っている——そういう年頃だった。

夜を照らす大自然の円いランプは、今は薄雲に遮られている。先ほどから出たり引っ込んだりしていたので、明日はぐずついた天気に逆戻りだろうかと少しばかり憂鬱だった。

夏休みにはまだ早い梅雨の中休み。

郊外に位置することもあり、家の近所は基本的に牧歌的な風景が広がる。

虫取りに魚釣り、秘密基地もお気に召すまま。活発な子供の遊び場に御誂え向きの立地。男の子っぽい趣味をしていた私にとって、土日はもれなくプチ夏休みもといプレ夏休みとなった。

放任されて好き放題の私は、七月に入ったばかりでもこんがり焼けていた。

かたや彼女は、塾と習い事で屋内に籠もりがちのため、前述の通り天使のように純白だ。

今思えば。多忙な彼女を引っ張り回し、日が暮れるまで遊びに付き合わせる横暴を、無邪気の一言で済ませて良かったろうか——と申し訳なさもある。

でも、その頃の私は、ただ、箱の中に閉じ込められた彼女を連れ出したかったのだ。

恐ろしいほど高い入道雲と、馬鹿みたいに暑いかんかん照りの、この夏の下に。

「この曲には『感傷的な散歩道』っていうタイトルがあってね……」

片方で声を聴きながら、もう片方で音楽を共有する。宝石のようでいて石鹸みたいな彼女のウォークマンから、ずっとピアノの音色が流れていた。

通っている教室の課題曲か何かだろう。クラシックの趣味はないので、普段なら蘊蓄を聞かされても右から左に抜けていく。しかし、その日の話には不思議と惹かれるものがあった。

ただ、なんとなく。

これは今夜の、あるいは私たち二人の曲だ。

そんなふうに思わせる予感があった。

「ねえ」

彼女が不意に立ち止まる。繋いだイヤホンに耳を引っ張られるように、一歩遅れてそれに倣う。

約束にも似た小指はいつの間にか離れていた。

同時。雲の切れ目から、月が顔を出した。

ほとんど無意識にそれを見上げようとした私を、空へと攫うように大きな体が包んだ。

「ごめんね」

いつものハグとは違う、とすぐに判った。

生に満ちた鼓動はやけに熱っぽくて。

命を削って我先にと鳴いている虫の声が遠く、何キロも離れた踏切の音が近い。

世界から足を踏み外した感覚だった。

現実感がなく、次の一歩を踏み締められないのに、ふわふわして心地良いのは何故か。

「これから先、どれだけ私を恨んでも構わない」

初めての表情で、一心に私を見つめる。

潤んだ彼女の海に、戸惑う月が浮かんでいる。

「それでも――」

一生のお願いのようで、今生の暇乞いのように。

「私以外の女の子にならないで」

彼女の頼みは、後にも先にもその一度きりだった。

幼い我が儘に付き合わせてばかりで、それでも笑って頭を撫でてくれて、まるで使命とでも言うように隣にいるのが当たり前だった。

私の理想であり続け、やがて目標となる彼女。

彼女の本当に、私も本当で応えたいと思った。

「お願いよ、伊月」

「うん。海月お姉ちゃん、大好き！」

精一杯の爪先立ちで、彼女の頬に口付けする。

愛の告白にはこう答えるものだと知っていた。

おませだったのを自覚して、こっぱずかしくなるとそのまま頬擦りをして夜を見上げた。

「私も、伊月のことが大好き」

彼女のごめんねの意味。

電線が別つ空の満月も。

そんな胸のざわめきは、耳元で囁かれる真実の前では無に等しかったから。

安芸津海月。

唯一、血を分けた姉妹の片割れ――そして初恋。

その夜の告白を以て、私は彼女の永遠になった。

1／アタシがわたしだったころ

それからまもなく海月が消えた。
ある朝、目を覚ますと隣のベッドが空だった。
二人姉妹には広すぎる子供部屋に、次の日も、そのまた次の日も、わたしは一人きりで。
だれにも告げず、忽然と姿を消した。
要するに失踪した。
神隠しか何かだと思った。
幼心に理解したのはそれくらいで。
あの記憶は夏の夜の夢に違いなく。
月下の誓いは、呪いへと変わった。
けれどわたしは再会を頑なに信じて、残りの人生を捧げても構わないと、長い夢に落ちるのを望んだ。

ブラインドの隙間を縫って日が差し込んでいる。
汗と血とその他諸々。そんな住人の生活臭に、ドアの向こうから店屋物の雑多な料理臭が僅かに混ざる。文字通り臭いものに蓋の用途で使われる芳香剤は先週切らして買っていない。
残り香を嗅いでいたいなんて変態的な感傷に耽るつもりはないが、生理的な安心感があった。このローズはだれのシャンプーの匂いで、バニラはあの子のボディソープか、と嗅ぎ分けるには少々時間が流れすぎたけれど。酸いも甘いも引っ括めたこの空気は悪くない。
目覚めの眩しさに目を細めつつ、枕元のケータイに手を伸ばそうとしたが途中でやめた。
「て言うか、重い……」
体格的にはこちらがされるべきだろうに。
アタシの左腕を枕にして。胸と尻以外には女らしさの欠片もない同僚が眠りこけていた。涎（よだれ）を垂らして半笑いの顔は、何かろくでもない夢を見ているの

だろう。

南雲栞。アタシの仕切る店……ではなく組織、というか結社？である『ナハトムジーク』に比較的最近転がり込んできた新参者。ここのマスターである女の贔屓もあり、あれよあれよという間に実力を付けてトップの座を狙っている——と、勝手にアタシは推測している。

図太く図に乗る図体のでかい女。知はないが能はある、早い話が筋肉馬鹿。

歩く非常識であるアタシでも、時々引くほどの阿呆だった。

“うっせえ。脳の四割はタンパク質だぞ、なら実質筋肉だろ？”

と言い返してくる程度の知識はあったが、残り六割は脂肪だと知らないのだろう。指摘するのは可哀想なのでよしておく。少ない脳味噌をさらに絞って脳筋に磨きをかけられると流石に不憫だ。半分本気でそう思うほど、殊体作りにおいてはストイックな奴だった。

それにしても。涎でお気にのナイトガウンを汚されたら殴っていた。幸いにも昨夜は下着で眠っていたので被害は二の腕のみに留まった。

彼女はと言えばすっぽんぽんだった。

肩も背中もゴツゴツして有り難みのない身体をしている。ゴム毬のごとく飛び出した乳はシリコン製かと思えば大部分は大胸筋らしい。何を食ってどんなトレーニングをすればそんな風に育つのか。

「栞君は年齢的にも非凡な肉体だと思うが」

色々デカい栞より背はさらにのっぽの眼鏡女——他でもないこの店の主はそう言っていたが、成長の良さで片付けるな。情けないぞ現代医学しっかりしろ。

すらりとした曲線美あってこその少女だと説教したいが、栞に限っては男女以前にホモサピエンスかどうかも疑わしい。アタシが日頃から『メスゴリラ』と呼び続けているせいで野生に目覚めてしまったの

だとしたら、ボスとして多少の罪悪感は覚えなくもないし、気に入る動物園を斡旋してあげてもいい。餌のバナナも弾むから、糞を投げるのは勘弁してよ。

——冗談半分の話はさておき。

「今なら寝首を掻けるかしらね？」

ライバルの無防備な姿に悪戯心が疼かないと言えば嘘になる。

唇を無理やり奪おうか、という気は不思議と起こらなかった。代わりと言ってはなんだけど、額を鉛玉でぶち抜いて、裸にひん剥き両手両足を縛って真冬の川に投げ込んでやろうか。

その程度でコイツは死なないだろうと思うし、やはりアタシにとっての天敵に違いなかった。

「んがっ」

善処したつもりだったが、腕枕の引き抜きに失敗する。昔テレビで見たテーブルクロス引きのように上手く行くつもりだったけど。

突っ伏して変な声を出したが、数秒後にはまた寝息を立てている。

隙を見せたが最後、命が幾つあっても足りない。そういう世界に住む者同士のはずなのに、全く腹立たしいことにコイツは生き残っている。

この調子ならどうせ、アタシが届かない未来にも届いてしまうのだろう。

頑丈で強運なだけの馬鹿が渡っていける辺り、この業界は意外と甘いのかもしれない。

目の上の瘤（こぶ）というか、商売あがったりというか。流石のイツキ姉様でも、時にはプライドが傷付いてしまうというもので。

「ッたく。足引っ張らないでよね」

それに、後ろ髪も引かないでよ。

シャワーを浴びて戦闘服に。

黒のカーデを羽織り、胸元は気持ち大胆に。

璃菟樹（あきついつき）はいつだって孤高の殺人鬼。

そしてここ『夜想曲（ナハトムジーク）』で一番の女。

運命に泣かされもせず陰謀に操られもせず。
アタシがそうと決めた日から、世界はそう回っている。

涙と後悔なんてダサい女の玩具は要らない。
そんな紛い物（ジャンク）の飾り物（ジュエリー）は、安芸津伊月（わたし）で包んで捨ててきた。

名は体を表すと言うけれど。
三つあるとしたら本物はどれだろう。一続きのようでいて、三者三様の別人であったようにも思う。自分にとって、後ろ一つは間違いなく「アタシ」だった。
偽物なのは「わたし」だったあの頃。
特にわたしが八雲伊月（やくも）だった頃の話。
封印した最悪な時代、要は黒歴史ってやつ。
八雲邸は京都の郊外、田園地帯の広がる盆地にあった。
結婚してすぐの頃はマンション暮らしの夫婦だったが、海月が産まれて手狭になったのかもしれない。
母方の家系は大百姓で腐るほど農地を持っていた。結婚祝いにでもと田を譲ってもらい、宅地造成してそこに一軒家を建てた。
南向きの二階建て。庭を見渡せるガラス張りの広い玄関。中に入れば左手に居間とキッチン。右手には応接間も兼ねた大部屋があり、それをぐるりと取り囲む廊下とは磨りガラスの引き戸で全面が仕切られている。東側は書斎や物置となっており、北の端にはお手洗い。南の隅には縦横に枠の入ったガラス窓があり、それに面して数段進むと右手にカーブする二階への階段。大部屋は一階と同じ間取りで海月のアップライトピアノもそこに置かれていた。あとは各々の私室兼寝室と、玄関の直上には物干し用のベランダが突き出ていた。
遠目には、ちょうどクリームを挟んだビスケット

を二つ重ねたような、ぱっと見では住宅らしくないシルエット。内装は仏間を除いて洋式だったが、なんとなく洋館かぶれした趣味が見て取れる。その辺りはマイホーム資金を援助した父方の親の影響らしい。老後に備えた二世帯住宅を想定していたらしく、空き部屋が多いのも納得だった。

家族四人には少々広すぎる空間に、両親と姉とで暮らしていた。執事や家政婦がいるわけではなく、自分がお嬢様だという自覚はない。でも、ブルジョアだと言われたら否定はできなかったと思う。

父は薬剤師、と言っても処方箋から調剤する薬局のおじさんではない。どちらかと言えばお役所寄りでお堅いというか、新薬の治験に関わっているとかいないとか。生まれは『八雲薬品』という製薬会社の御曹司で、親の会社に就職した後に転向していた。早い話、自社の薬を認可させるべく八雲家が送り込んだインサイダー的存在だったんじゃないかと思う。次男坊で屈折したプライドを持つ、色々と尊敬できない男だった。

母親はお医者様、と言っても白衣を着ていつもニコニコと聴診器を当ててくるそれではない。具体的には監察医と言って、年がら年中おかしな死体を腑分けしている。板前にとっての魚くらい彼女はヒトを捌き慣れていた。家庭でも性分は変わらず。肉や魚は血管と寄生虫を取り除かないと落ち着かぬ性格から、消去法的に似非菜食主義者だった。

そういう両親の下で育ったからか。

将来の夢リストからは国家公務員やらその手の夢のない職業は自然と除外された。

けれど、感受性豊かな海月は独りでにそういうベクトルを向いていた。将来は順当に医療関係の職を目指す、そういうレールに乗っていた。

あの人は全く理解していなかったろう。

海月は、外からの圧力ではなく、内からの意欲で道を選択していた。仮に放任主義だったとしても、奔放に突き進んでいくわたしと正反対に、一歩一歩

堅実に、だれに言われずとも父か母の背中を追っていたはずだ。

生まれ付き正しい器を歪める道理はない。

海月の失踪は父が壊れる引き金となった。

あるいは彼女が壊れた父から逃げ出した。

父の兄で、八雲薬品の跡取りである伯父が、何かの事件を起こして捕まったと聞いた。家庭内ではタブーな話題で、親戚付き合いで時々会っていた双子の従姉妹ともそれっきりだった。

母の紫月は、父ではなく八雲薬品に嫁いだのだろう。彼女自身による戦略結婚というか、大きな野望があったように思う。あくまでわたしの想像でしかない。だが、悔しいことに女の勘は遺伝なので当たっている気がする。

どんな不祥事や御家騒動だったかは知らない。

結論から言うと、八雲薬品は大きく傾いて沈んでいくところを買収され、八雲の雲の字を申し訳程度に残した、なんとかクラウドファーマという新会社に吸収合併された。

父は昔から伯父を妬んでいる。子供のわたしにでも解るほどだった。元々家督を狙っていたのだから、捕まったと聞いた時には逸る気持ちを抑えきれなかったはずだ。

けれど夢は叶わなかった。

創業家の八雲は退陣を迫られた。

父はそれでも諦めない男だった。そういうふうに育てられたからだろう。自分自身が無理なら娘の海月を送り込み、ゆくゆくは八雲の看板を取り戻すのだと燃えていた。

妄執という炉に焼べられた者の苦難は想像に難くない。

行き過ぎた教育は、海月を八雲家の完璧な跡継ぎ、才媛と呼ぶに相応しい存在に仕立て上げるための布石だった。

ああなんて可哀想な海月。

やっぱりわたしが連れ出したのは正しかった。外

の世界を知って、彼女はようやくその檻を破って飛び立ったんだ。あの夜の告白もきっと、しがらみを断ち切っていつか結ばれる日が来るまで待っていてほしいと、海月なりの懸命を尽くした結晶だった。

だから、これに懲りてパパも馬鹿な考えから目を覚ましてくれるはずだろう――。

そう考えたわたしは浅薄なガキに違いない。

あとはご想像の通り。父にとって、わたしは海月のスペアでしかなかった。

元々、家族ごっこ染みている感覚もあった。父らしい父でなく母らしい母でもなく、典型的かつ妥当な関係性を形成できたのは、海月とわたしの姉妹だけだったから。

友達との登下校は、車での送り迎えに変わった。放課後は英会話とピアノ教室、帰宅後は父直々にお説教（彼に言わせれば帝王学だろう）を叩き込まれる。ようやく解放されたかと思えば、その後は家庭教師が待っている。学校で割り振られた宿題を終わらせ、湯船に浸かれば眠気で溺れるためやむを得ずシャワーを浴びる。日付を跨ぐのは当たり前で、早朝は心身鍛錬のためだと毎日ランニングを強要された。

瞼を擦れば眠気覚ましを飲まされ、少しでも不真面目な素振りを見せようものなら説教の時間が倍になった。初めの頃は習い事をサボりもしたが、性根を叩き直せと言われ、悪評しかない武道教室に放り込まれた。己の手で虐待するのは避けたかったのだろう。けれど、数ヶ月もすると父から頬を張られるのは日常となり、切っ掛けさえあれば殴る蹴るに発展した。

紫月の制止はいつも暴力の雨が降った後だ。

頭に血が上っても――上っているだけだからか、その一言で父は正気付いた。わたしは大抵倒れ伏して顔も上げられないので、母がどんな表情で言っていたかすら知らない。絶体絶命の状況で救ってくれる神様のようにも思えたし、玩具が壊れても替えは

ないぞ――と駄々っ子を諭しているだけのようにも聞こえた。その声に感情がなかったことだけは確かだ。

一日が終わって一人になると泣いてばかりだった。父の前で泣き顔を見せれば烈火の如く叱られて罰が増えるだけだろう。

海月が恋しい夜は彼女のベッドで眠っていた。

涙と涎と鼻水を垂れ流すせいで、残り香に縋っていられたのは数日だった。

地獄のような日々が続くうち、こんな苦しみを海月に押し付けていたのかと、自分の愚かさを呪うようになった。わたしが本当に父の望む人間になれたなら、安心した海月も帰ってきてくれるのではないか、と自分でも信じていない希望を夢想するようになった。

狂気に応えようと前進するほどに、絶望はより濃度を増していく。

海月とわたしは器が違った。

同じ血を引き、同じ家に生まれ。確かにスタート地点は同じだったはずなのに、自然とお嬢様になっていった海月と、跳ねっ返りに育っていったわたし。

手を加えずとも、彼女は綺麗なダイヤだったし、わたしは醜い泥団子だった。

父とわたし、お互い白髪(しらが)だらけの頭に十円禿げをばらまく頃が来て、ようやくそれを悟った。

ある夏の蒸し暑い夜。

あろうことか、わたしは父の前で決壊した。

海月の名前を繰り返して、帰ってきて助けに来てと狂ったように叫び回った。幼子のように、その願いが夜空を抜け海月に届くと信じて、どれだけ父が怒鳴ってもやめはしなかった。

気を失うまで殴られると覚悟していたし、そうなっても構わないと投げ遣りになっていたのに。彼は何発か拳を振り下ろしてから不意に沈黙し、幻覚の蝶々にでも誘われるかのように、ふらふらとおぼつかない足取りで部屋を出て行ってしまった。

直前の狂乱が引いて余計にそう感じるのだろう。
怖いほどしんとした部屋に一人立ち竦む。
軽く目眩がして手を突けば、白鍵（はっけん）の音色がきらきらとさんざめいた。
だれが蓋を開けたのだろうか——そう考えて、今晩父に怒られた切っ掛けは、わたしが勝手に海月のピアノを触っていたからだと思い出す。弾ける曲など何もないが、それでも音色が恋しくなって、見様見真似で熱中していたら家庭教師の時間に遅れた。噴火するように激怒して、教師を帰らせて何時間も罵詈雑言と暴力の嵐だった。
一瞬遅れて息を呑む。
今ピアノを鳴らせば反省していないと主張するようなものではないか。父は今度こそ手加減なくわたしを殴り付けて、今度という今度は——。
その想像に震え上がって、直前までうずくまっていた床に倒れ込み、土下座のように頭を擦り付けようとしたとき。小さな影がわたしに向かってきた。
「セレナちゃん」
垂れた大きな耳を引きずるようにして、とことこと短い足で走る姿は愛らしい。いつもの眠たげな顔をして、間抜けな三白眼でわたしを見上げてくる。普段はこの部屋に入ってこないが、父が開けっ放しにしていたせいで隙間から潜り込んだらしい。
「ダメでしょ、こんなところに来ちゃ。……わたしなら大丈夫、安心して」
額を撫でて諭すと、くーんと小さく鳴いて部屋を出て行く。心配そうな顔をして一度わたしのほうを振り返ったが、首輪に付けた鈴の音で、大人しく階段を降りていくのが分かった。
セレナは、元は海月が飼いたいとせがんで購入したペットの犬だ。今はわたしが世話をしている、今となってはこの家で唯一の話し相手。
海月の躾が良かったお陰だろう。聞き分けのよい従順な性格をしていた。
と、階下からセレナの悲鳴のような声が聞こえて、

すぐに荒々しくドアの閉まる音がした。

機嫌の悪い父は時々、わたしが嫌がるのを知っていて、だからこそ罰としてセレナをよく蹴っていた。いつのことだったか、翌日になっても苦しげな声で鳴いていた日があり、動物病院に連れて行くと肋骨が折れていた。流石に紫月も彼に言い聞かせたのか、幸か不幸か以後はわたしだけに暴力を振るうようになった。

最近は止まっていたはずだが再発したのかもしれない。不安になって耳を澄ませてみるが、外は先ほどから激しい雷雨だ。バラバラという雨音に邪魔されて屋外の音は聞こえない。

ややあって、玄関ドアの開く音。

ひゅっ——と何かが空を舞う音。

りりん——と何かが床を弾む音。

後ろの二つは多分同じモノだろうと思った。おそらく父がセレナの首輪を廊下に投げ捨てたのだろう。

「……？」

そこでふと思い出す。首輪は海月がいた頃からセレナに着けていた、ある種形見のような品だ。成長したことで少々窮屈になっており、ベルトの穴は一番広くしているが外す際には少々手こずる。このところ忙しく散歩に連れて行く回数は減っていたが、わたし以外がセレナに触れることはないため、そのことは一番よく知っていた。

なら、父は何故こんな雨の日に首輪を外してやったりしたのだろうか。そして、何故わたしに伝わるようにそれを投げ捨てたりしたのだろう。

ぼんやりと思考していて気付かなかった。階段を上がってくる足音は既に踊り場を過ぎて、倒れて気絶した振りをするか迷っているうち、手すり越しの父と目が合った。

レインコートも着ていないずぶ濡れで、突き出すように目を見開いてこちらを睨んでいた。わたしを確認して一瞬立ち止まったが、足早に彼は部屋へと

向かってくる。

この場所にいてはいけない。

すぐ逃げなければならない。

本能的な直感はあったけれど、全身はがちがちに硬直していて。動け動けと命令しても、ブリキのロボットのようにぎこちなく、目を逸らし床に伏せることすら間に合わない。

開口一番、この失敗作が、と父はわたしを罵った。熱を帯びた棒状の何かで顔を撲たれたあと、その切っ先が眼前に向けられたのを見て、唐突にある想い出が再生された。

――家族で秋の野山へ出かけた日。イノシシを獲りに行くと聞いて、張り切ってダンボール製の檻を作り、餌のお菓子も準備した。当時のわたしにとって、イノシシは毛が生えたブタさん程度の認識だった。

わたしの設置した檻目掛けて、ウリ坊を引き連れまさに猪突猛進してくる巨体を見て、こんな紙の檻で捕まえられるだろうかと不安になった。初めて死の恐怖を覚えたのも確かその時だ。

次の瞬間、イノシシの頭が弾けた。

床に落とした苺のムースみたいに鮮やかだった。

遅れてパンパンと何発かの乾いた音。勢いを保ったまま急カーブを描いて檻のそばに転倒する親イノシシ。ウリ坊は、四肢ごと肉が飛ばされて達磨になったもの、ぐちゃぐちゃに潰れながらも蠢動（しゅんどう）するもの、運良く無傷だが親の周りで右往左往するもの、それらを見捨てそそくさと森へ逃げ帰るものとバラバラで……それが何かひどく可笑しいモノに見えた。

〝次は伊月が撃ってみなさい〟

散弾銃を携行していた父の手柄を横取りし、一家をライフルで散り散りばらばらに引き裂いた紫月は、戯けたように言った。

わたしが記憶する限り、母が笑ったのはあの一度きり――。

耳の奥、尾を引くような高音が鼓膜を揺らしていた。

「あなたが撃ったことにしてもいいのよ」

想い出から覚めれば、わたしを睨んでいた二つの縦穴は既になく。

両腕に散弾銃を抱えたまま、ばったりと仰臥（ぎょうが）した何かの姿が正面にあった。潰れた苺のムースというより、熟しすぎた石榴（ざくろ）のようなモノが大口を開けている。

「あとね。泣いても海月は戻らない」

違和感がして首を横に向ければ、わたしの肩を台に、重く無骨な筒が乗っていた。紫月の持ったライフルがわたしの体を離れて、固まった関節はようやく自由を取り戻す。

へなへなとその場に座り込む……なんてことはなかった。

床に転がったそれの傍にしゃがんで、てきぱきと確認を済ませていく母の姿を見て、初めて彼女の仕事を認知したような、ある種の感動にも近い思いがあった。

「橈骨（とうこつ）動脈は脈拍なし、心音確認できず、対光反射の確認は……ちょっと無理ね。真正面から狩猟用のライフルで眉間を一発、弾は後頭部を貫通。脳は大部分が飛んでる、即死でしょう。診断書なら書くわ。早く運び出してほしいの、この時期は少々匂うから」

正当防衛かどうかは、警察が来れば明らかになるだろう。彼は銃を持ったまま硬直するだろうし、わたしという証人もいるのだから、紫月が恐れることは何もない。

受話器越しの相手が戸惑うのも構わずに、用件を伝え終えると紫月は電話を切った。

それから数日後。わたしたち親子は八雲家から絶縁され、母方の安芸津（あきつ）姓を名乗ることになった。姉妹で名字が変わってしまうのが嫌で、八雲のままがいいと伝えたところ

「今日からはあの子も安芸津、あなたも安芸津よ」

そんな必要最低限の回答が返ってきた。

海月が姿を消してから八雲伊月が終わるまで。

数十年にも思えた数年は、身も心にも傷と瘡蓋(かさぶた)を残して。

名が体を表すと言うなら、わたしは本物のわたしへと近づいたのだろう。

あの夜、海月が愛した「わたし」は、もうどこにも見つけられなかったけれど。

転校デビューに成功した。

住み慣れた八雲邸をめでたく追い出され、わたしと母は隣町へ引っ越した。川を挟んで以前よりはいくらか山寄りになる。その実ずっと都会で、徒歩圏内である駅チカにはファミレスもマクドもゲーセンもあった。

新居の真新しいマンションは、広い間取りの割に相当お買い得だったらしい。事故物件というやつだ。新築時の住人は子沢山の夫婦だったが、不幸があり二人揃って亡くなったことで子供らも引っ越し、空き部屋になっていたとのこと。

揃って、というところが曲者で、部屋で死んだわけでもないのに何かの呪いだとか悪評には事欠かず、査定額が著しく下がっていた。

人の噂もなんとやら。底値で賃貸に出ていたところを紫月が見つけて、七十五日もせぬうちに親子で入居した。紫月がそうであるように、わたしも霊やその類いは信じないタチだ。

元より、実父がドタマを破裂させて脳漿(のうしょう)をぶちまけた家に比べれば、その程度の曰く付きは可愛いものだろう。実際問題、八雲は先の御家騒動でスキャンダルとなったこともあり、今回の事件を嗅ぎ付けたマスコミは八雲薬品の件と絡めて面白おかしく報道していた。風評を懸念したなんとかファーマから

の圧力で沈静化したか、政争の話題に流されて自然消滅したのかは分からないが、そんな狂騒も数日のことだった。

いずれにせよ、わたしたちを追い出したところであの家に住む人間がいるとは思えない。それとも当初の予定通り、祖父母が脳味噌のシミと一緒に暮らすのだろうか。

事件以後、紫月の無口ぶりと無表情はさらに磨きが掛かった。

あの男が死んで、母の存在を意識しやすくなったからそう感じるだけかも、とも思う。八雲家の影響力など今は昔で、どちらかと言えば『暴力パパから咄嗟に娘を守った親の鑑』といった報道のされ方をしていたが、本人はなんの感傷も抱いていないようだった。

それにはわたしもお笑いだと思った。

正当防衛は認められても銃刀法違反が云々、と画面の向こうの専門家は言っていた。ムショまで行かずとも家に帰れば顔を合わせるので、罰金か何かで済んだということだろう。しかしながら、流石にライフルは没収されたらしく少し残念がっていた。

あの事件に対して紫月は、夫を合法的に殺せたという達成感しかなかったのではないか。八雲への興味も失っていたように見えたし、本家の騒動以降、彼女は露骨にあの男に対して冷たくなっていた。もはや突き放すようですらいた。あの男がエスカレートする一因になった感は否めず、その点でわたしは当然紫月を憎んでいた。虐待に関しても、現実に消えない傷が幾つも残って、母としてもっと早く止めてくれていたなら——と憤りもした。

それも今では終わった話。

話が逸れたが、わたしの転校の話に戻ろう。

夏休み明けから転入する学校について、紫月は二つの候補を提示した。逃げるつもりはないがこだわる理由もなく、元の学校に通うという選択肢は最初から頭になかった。

一つは山の裾野の大きな女子校。如何にもお嬢様の園という雰囲気だが、地元のいいとこ育ちが右も左も知らないうちに収容される監獄もとい私立学園だ。一貫教育で途中編入の生徒は少ない性質上、編入試験はそれなりの難関。わたしの学力ならおそらく入れるだろう、という話だった。

もう一つはマンションから近い普通の公立校。偏差値は高めだが、今のわたしなら以下省略。

まさか紫月が選択肢を提示するとは思わなかったので少しばかり迷った。てっきり学校も何もかも、そんな人生のレールは敷設済だと考えていたからだ。あの男の影響下に置かれていたせいもあるけれど、母も母で大概というか、わたしに選択権を与えることは希だった。

だから、紫月が何かを試したいのだろうという意図も察していた。

迷ったと言ってもほんの数秒、わたしは後者を選択してフツーの学生になった。

真面目に考えれば、前者を選ぶ理由なんてこれっぽっちない。例えその学園が海月の母校だと知っていても、彼女はとっくに卒業している。

第一、わたしはわたしの道を生きると決めていた。塾も習い事もずっと姉のお下がりで。挙句の果てに学校まで同じなんて、それこそ未だにあの男に服従させられているようで、ただただ純粋に癪だった。

もっと打算的な部分で言えば。そのオペレーション・ゴーイングマイウェイを実行する上で、お嬢様学校だと色々障害が多そうだと感じたのもある。

「なるほどね」

まあいいわ、と。落胆したとも予想通りだとも取れそうな、曖昧ではあるが意味深な表情を見せた紫月には若干イラッとしたが。

わたしの選択はやはり正しかったのだろう。

転校先はすこぶる快適だった。わたしがわたしを演じるのにぴったりで、生徒の自主性と多様性を許容する懐の深さを持った、フツーのガッコーだった。

——よって安芸津海月はグレました。

ヤンキーと言うほどでもなく非行に手を染めもしないので、半グレ……と言えば余計に悪化してしまうか。授業に出るよりサボりの比率が高い、一般的な素行不良児となった。

スクールカウンセラーの御墨付きも一応ある。事件から日が浅い転入直後は、睡眠障害による居眠りが多く、保健室の常連であり——つまりは後遺症で不可抗力ではなかろうか。一週間もすると昼間の暇潰しだけでは元気を持て余し、合併症からやむを得ず夜遊びの発作を起こすようになり、一ヶ月が経過した今もなお予断を許さない状況である……ということにしておく。

紫月が煩くなると厄介なので、一応朝の出席はキープしている。これでも皆勤賞なので褒めてほしい。

授業に出るかは気分次第、それとこれは話が別。

自由権は基本的人権にも含まれている、と公民の教師も仰っていた。それとも、貴校の教師は生徒に嘘を吹き込んでいるとでも？

「素晴らしき哉、人生」

そういった訳合いで、今日も午前からサボりだった。

「おはこんばんちはなら〜」

と。賑やかな、というには少々耳障りな声で、挨拶をして部屋に入ってくるチビがいた。

「何よそれ」

「え〜？　今ナウでヤングなギャルの間で流行ってるんスよ〜」

「それ言うなら『おはこんばんちわ』じゃない？」

「おっ。また古いネタを……ま、元ネタはそっちっスけど」

「じゃ、さよなら」

「ちょっと！　ちょっと、」

チョップで黙らせる。

何も騒がしくしたいから授業を休んでいるわけで

はない。一人になりたくて、というほど根暗でもないけれど、やかましいのは勘弁だ。

「おやびん、例のブツです」

「あんがと」

「いや、そこはもっと『お主も悪よのう』とか……」

ぶーたれるのを無視して、わたしは弁当箱を差し出すとビニール袋を受け取った。

「ほへひへほ」

「汚い」

「ひははふはひっ……ぐ、げほっ」

あ、噎せた。と透かさず桃水（桃天とも言う）を差し出すお人好しには自分自身呆れもする。

どうでもいいけど間接キスだった。意識する相手でもなし、本当にどうでもよかった。

「間接キス、ゲットだぜ！」

「黙れ返せ殺す」

十月。俺はまだ終わっていない……とでも言いたげな往生際の悪い夏が、今日も窓の外から鬱陶しく主張していた。衣替え移行期間とやらのリミットも迫るが、三十度はありそうだ。

こんな日に冬服を着たら溶けてしまう。朝礼時のクラスのお仲間たちは半々という比率だったので、明日は机に花瓶が沢山並んでいるだろう。ほにゃらすれば花屋が儲かる、みたいな感じで。

期限を過ぎたところで、暑ければシャツにスカートで登校するだろう。その程度に不良という自覚はあるし、現にネクタイも着けていない。ちなみにそれは隣のバカチビも同じだった。

「あ。ブラ透けてる」

「えっ……って、別にいいじゃない。女同士だし」

「今の『えっ……』をもっかい」

本日二回目の鉄拳制裁を食らわせた。

「それ以上やったら縮むっスよ！」

「縮めバカ死ね」

と言うか、既に縮んだ後じゃないのか。椅子の高さは同じなのに……そんな座高の低さで、頭をガー

ドしているのかたんこぶを確認しているか分からないポーズで、上目遣いにわたしを見上げて抗議する。

この女はアカネ。名字は知らないし、名前もどういう字か分からない。

「真名は契約者にしか明かせないのがなんとか戦争の理（ことわり）」

と低くこもった作り声で初対面のときに語っていた。変な契約を結ばされるのは嫌だからとスルーしたのでそのままだ（本人は訊いてもらいたそうだったが無視した）。

一応は女で先輩。そう前置きするのは、絶壁からは胸らしき膨らみが観測できず、先輩というのも彼女が年上の生徒と話しているところを見るほうが多いからだ。もしも男で年下だったら問答無用で死罪だった。

どうしてこんな『傍目にもイタい女』と連まなければならないか、という質問はご尤もなので答えると。保健室の冷蔵庫を私物化した罪で出禁になり、学校で居場所を失った可哀想なわたしが彷徨った先で辿り着いた楽園――この空き教室にコイツが居着いてしまったからだ。

「ここは元々わっちのサンクチュアリ！」

とか言っていたが立ち退きを要求した。それでも毎日やって来る彼女とは平行線で、以後は冷戦状態が続いている。オリンピックのニュースで観たが、どこかの共産主義国なら教室ごとブルドーザーで潰されているところだ。

皮肉にもそのせいで、この学校で会話を交わす唯一の生徒がアカネ先輩だった。

「こんなにおいしいお弁当を作ってくれるなんて、良いお母様を持って幸せ者っスね」

「バッカじゃないの。わたしのママはサイコパスよ」

「そんな、私の彼はパイロット、みたいに言われても」

「何それ」

「ご存知、ないのですか？」

時々アカネの会話にはついて行けないことがあ

る。隠れオタクを自称している彼女だったが、ちっとも隠れていないのは確かだ。

「まあまあ、伊月ちゃんのサイコママのお陰でわっちも飢え死にせず済むわけですし、ここはみんな仲良く」

「わたしに何もメリットないんだけど。て言うか、勝手に名前呼びしないでよ」

「前に名字はダメって言ってたじゃないっスかー」

「なら呼ばないで。話し掛けないで。知らないことにして」

「え〜？　もし名前を知らなかったら、二人あの場所で再会することはなくなるんスよ？　千駄ヶ谷（せんだがや）からダッシュしたくないんスか？　わっちなんかもう三回くらい――」

「アンタのその発言がタイムリープでしょ」

日光浴のように窓際で外を向いてどうでもいい会話を交わす。暑いなら日陰にいるべきだが、暗いのは苦手だった。それに、廊下側まで風は入ってこない。

わたしの焼きそばパンはまだ残っているのに、アカネは二段の弁当をもう平らげていた。喋ってばかりなのにいつ食っているんだ。と思ったところで、だから喋りながら食べるのかと腑に落ちた。彼女はいつもそそっかしいというか、せっかちというか、ともすれば生き急いでいるようにも見える。こうして毎日サボっているならそれはないと思うが。

冷静に考えると、彼女が居着いた理由の一端はわたしにあるかもしれない。

初めてここで出会った日。先客がいると知らず一度は出て行くか悩んだが、わたしを視認しておっかなびっくりという様子の彼女に、これなら行けるとずかずか踏み入り離れた場所に陣取った。

本校では初めてのプール授業にエキサイトし、直後に漢文なんてやってられるかと出てきたので確か四時限目のサボりだったか。早弁しようと弁当箱の蓋を開いたものの、あの紫月のお手製だ。中身は愛

情のない冷凍食品の惣菜が詰まっている。自然解凍でチンすら不要のずぼら飯だが小分けの包装そのままというのはいただけない。下の段には玄米がびっしりで戦前の趣がある。作ってくれるだけマシだろうとかそういう話ではないのだ。

普段は学食のパンで済ませるため袋から出すこともないが、あの日はそれだけ腹が空いていたのだろう。イライラしてゴミ箱に棄てようとしたところで

「……あの、それください！」

「は？」

今の「は？」は「急に話し掛けないでもらえますか」「そもそもあなたと話をする間柄ですか」「他人の弁当を恵んでもらおうなんて人としてどうかしていませんか」の意を含む。複雑怪奇な日本語の中でも最も汎用性に優れた感動詞である。

「いや、その。せっかくのお弁当、ゴミにしちゃうくらいなら……なんて」

「キモい」

ちなみに、この「キモい」は以下同文。複雑怪奇な以下同文。

あの日の餌付けが、アカネという小動物を懐かせてしまった原因だとするとなるほどわたしにも非はある。「は？」「キモい」といった完全拒否からの流れで、引き続き物乞いをしてわたしをギブアップさせた勇気は、全米が無理でも限界集落くらいは泣かせられる気がした。

「うわっ、野菜ばっかりじゃないっスか。しかも玄米って。乙女は肉食え肉」

蓋を開けるなり素に戻ったので映画化には難色を示すわたしであった。

彼女に然るべき制裁を加えたのもそれが最初のこと。まずは上下関係を解らせるのがペットを飼うときに重要だ、と海月も昔言っていた。

そんな回想に耽っているのも知らず。わたしのビニール袋に手を突っ込み、最初から自分用として買っていたに違いないメロンパン（果汁７０％入り

とあるがパン生地が作れるのか疑問だ）にかぶりついて満足げなアカネちゃんであった。

と言うか、かなり高そうだ。パシリに使っている立場で釣り銭は要求できない、とやはりお人好しなわたしの目を盗んで贅沢三昧かもしれないが残念ながらバレバレだった。

言動を鑑みるに推測は付くが、彼女は貧乏なのだろうか。もし橋の下のダンボールハウスで河原の遺棄物もといアレな本を売って生計を立てているのだとしたら、小学生でもケータイを持っている今の時代は厳しかろうと忠告したかった。

「じゃーんじゃじゃーん！」

「は？」

「『は？』じゃなくて……。この林檎マークが目に入らぬかー」

アカネは自慢げに、平べったくて下部の中央が丸く窪んだ板をわたしに差し出す。大部分を占める液晶には角の丸いアイコンがぎゅうぎゅう詰めになっている。

電化製品に疎いわたしでも見たことはあった。

「ただの音楽プレーヤー」

「ぶぶー、ハズレ～。何を隠そう、これは音楽も動画もネットも電話もできる万能の――」

「へえ」

「ワンモアシング……」

「ふーん」

「ちょ、ちょっと。流石に興味なさすぎじゃないっスか？」

「えらいえらい」

食事も終わり、会話を破綻させるとケータイに集中する。電話とメールはあまりしないというか相手がいないので、専らゲームかネットの用途で使っている。今日は読みかけの小説があったのでそのサイトを開いていた。

打たれ強いチビは、わたしの手元を見てにやにやしながら煽ってくる。

「全てのガラケーは過去になる、全く新しいアカネちゃんの神器に、もしや興味なしです？」
「別に。ガラケーでも音楽聴けるし」
「と言いつつ、いつもそのウォークマン持ち歩いてるっスよね。旧式の」
「……まあね」
シャツのポケットの中で透けたそれを指差される。
多分、置き忘れたのだろうと思う。海月の勉強机の引き出しにぽつんと残っていたそれを、お守りか何かのように肌身離さず持ち歩いているわたしは、ちょっと愛が重いだろうか。
見ていい、と訊いてくるアカネをついつい許してしまう辺り、他人に大事な物を気付いてもらえて嬉しかったのかもしれない。なんだか、そういうのはらしくないなと感じる。
「ＪＰＯＰのアルバムばっかり。それもベスト盤だらけ……まあレンタルだとお得ですしねー」
「悪い？」
「いえいえ。ただ、伊月ちゃんってクラシックな人なのかなーと」
「なんでよ」
「普段は背伸びしてワルぶってますけど、まだツッパリスクールに慣れてないのか、時々ふとした仕草や反応にお嬢様のコアが見え隠れしてますし。曲のチョイスも、あゆやエロかっこいい人のは全然なくて、ヒッキーやコウさんな辺りもなんと言うか――」
三発ほど拳骨を落としてウォークマンを取り返す。
あの曲いいっスよねあの曲そうアレアレ、と抽象的に機嫌を取られてもムカついていく一方だ。事実、海月が置いていった当時はクラシックのほうが多く、わたしも入っている曲を聴いていた。
今年の夏休みの終わり、宿題を急いで片付けるように伊月改造計画を進めていた頃に、適当なモノを見繕って放り込んだ。アカネが言っているのは大体

そのときのCDだ。容量が足りなくなったため、長ったらしいだけの交響曲は、ちょっとばかし海月への罪悪感はありつつも大方削除してしまった。新しく入れた音楽の趣味は、聞き慣れたという意味でも海月と近いのでチャラにしてほしい。間違ってもヘビメタやゴアグラインドはないので、彼女に返しても怒られることはないはずだ。

そういうところも、思い返すと少し自己嫌悪した。

アカネの言うお嬢様っぽさは、わたしの、海月に対する未練がましさから生まれる錆のような何かなんだろうと思う。八雲伊月は抹消したはずなのに、詰めが甘いぞわたし。

「ミツキさんって、お姉ちゃんですよね」

「は？」

「伊月ちゃん。もう少し口数を増やしましょうよー」

呆れ顔のアカネだったが、その質問は不意打ちすぎる。

彼女が何故その名を出したか推測は付いた。

筐体（きょうたい）の裏面にローマ字の刻印があったからだ。

「ちっちゃい頃から離れ離れでしたっけ。何年前……確か、」

「――――」

「ご、ごめんなさいっス。もう言いませんから。だから、わっちはともかく身長の命だけはっ」

全力でメンチを切ると、総力で頭をガードしながら平謝りされた。

訊くのも馬鹿らしいが身長の命ってなんだ。アカネには身長を伸ばすために別の生命体が共生しているのか。おかしな奴だと思っていたがやはり宇宙人なのでは。宿主のおまえが命を差し出してその『身長さん』が生き残ったところで意味はあるのか。そもそもどちらが本体だ。と突っ込みが追い付かなかった。

彼女が海月の名を知っているのは、どうせ事件の特集をどこかで見たからだろう。

報道の前にはプライバシーも何もない。家族構成

は勿論、職業も宗教も趣味も大っぴらにされるものだ。わたしの卒業文集や作文の内容が数年で激変したことはまだしも、紫月がベジタリアンであることを事件と関連付けて訳知り顔に物を言うおじさんは正直ギャグだった。

海月のことは、概ね虐待に耐えかねて失踪した少女として扱われていた。

それが本当かどうかは知らない。

会ったときに訊けば判ると詮索もしなかった。

――あるいは。身も蓋もないが、わたしは彼女に、結果として見捨てられた。そんなイメージを抱きたくなくて、ほとんど無意識に避けていた。

「でもまあ」

何が「でも」かはさっぱりだが、話を仕切り直したいのだろう、アカネが言う。

「今の伊月ちゃんを見てると……結局、お姉さんとの約束は守れなかったってことっスよね」

「は？」

今のは「本気で殺していいですか、て言うか殺すわよ？」の意である。

話は先週に遡るが、所謂恋バナをしたことがあった。初めて好きになったのはだれだったか、やれファーストキスはしたかエトセトラ、という面倒この上ないトークに巻き込まれた。

アカネはと言えば初っ端で

「わっちは生まれて此の方なんもなしっス」

と恋人いない歴イコール年齢を堂々と宣言したことで、ほとんど一方的に質問攻めである。さっさと話を打ち切りたかったので、例の海月の告白があったため、異性同性に係わらず恋愛関係は一切持ったことがないと答えた。そのときのアカネは「大変だったんスね」と神妙に頷くだけで、それは予想した反応と違って、どこか肩透かしだったのを記憶している。

なのに、今更そんな感想を持ち出すとは、このチビは自殺したいのだろうか。

今でも未だに忌々しいほど愛している。

例えこうして自ら落ち零れることを選んでも、海月に黙って不埒に走ることなんてあり得ない。仮に無理やり襲われたとしたら、一切躊躇せず襲った奴を殺すだろう。

「守れなかったってどういう意味よ？　お姉ちゃんは――」

――トカチさん、こんなところにいた。

「……あ、はい」

突然割り込んだ第三者に会話を脱線させられる。こちらの怒気が伝わったのかもしれない。やはり上級生だったが、わたしの存在に気付くなり恐縮するように会釈した。

（名字、トカチって言うんだ）

牛乳好きの化身のような名前なのにどうしてこれほどまでにミニマム級なのか。チビだったからトカチと名付けたとか……って、よく考えなくてもそれは無理がある。

見境なく喧嘩を売るつもりはないので、行ったら、とアカネに伝わるよう顎をしゃくった。

わたしの逆鱗に触れてしまったこと、その実クラスメートで溢れる場所へ戻ることに対してだろうか、彼女は露骨にしょんぼりした足取りで出て行った。

女の勘と言うほどでもなく、アカネは浮いているだろうなと予想した。

教室という狭苦しい容器の中で、変わり者……飛び交う弾丸と付かず離れずを維持できぬ者が孤独を貫くには、弾丸のほうが避けるほど強くなるしかない。例えば今のわたしのようにだ。

距離感も掴めない隙だらけのチビが、生き残れるほど甘い戦場だろうか。

「ま。だから毎日こんなとこ来てるのかも」

月並みな表現だけれど、ちくりと喉の奥に小骨の刺さるような予感があった。仮に現実となったところで、わたしはどうとも思わないだろう。

アカネとわたしは別の道。
出会いこそすれ、最後まで交わることのない平行線だったというだけ。
「バカらし」
理由のない、理由を考えたくもない癇癪玉が爆ぜる。空になった弁当箱を、もう不要だろうとゴミ箱に投げ棄てて空き教室を出た。
次の日から安芸津伊月は孤高の存在に戻った。
アカネは家庭の事情で学校をやめたとのこと。
家庭の事情なら仕方がないわねと受け容れた。
一人っ子で、兄弟もいなければ両親もいない天涯孤独の身。どこか自慢げに笑っていたアカネの言う家庭の事情とやらも、彼女は訊いてほしいのだろうけど、とうとうわたしは訊いてやらなかった。第一どう訊けばいいか分からないし、出会って一ヶ月少々、友達未満な人物の心を忖度できるほどの想像力は持ち合わせていない。
アカネはきっと、気紛れで楽園に現れた妖精さんのようなものだ。わたしの前には、天使とか妖精とか、そういうふわふわした存在がよく現れるので知っている。
彼女らは彫刻の傑作の永遠のようでいて。
存外に不可逆で有耶無耶に消える夢だと。

十分に大きな嘘を繰り返せば、人々は最後にはその嘘を信じるだろう。
プロパンガス……いや、プロバイダだったか。とにかく、心を操るのが得意なドッペルゲンガーみたいな名前の偉人だか悪人が、昔そんなことを言っていたらしい。ある意味、わたしが実行した計画はそれに近かった。
八雲伊月が悲劇のヒロインなのは公知の事実だ。
無論、そう思われたまま温室で育つのも一つの選択肢と言えた。気遣い気遣われながら、不幸に囚われた人を演じて日々を送る。そんなふうに適応して、

新しい学校でも大人しく折目正しく過ごすことはできた。

死んだ人間に怯えて、トラウマを抱えながら生きることは、わたしにとって緩やかな終身刑にも思える。周囲が『わたし』をそういう存在だと認識する前に抗わねば、わたしはわたしを乗っ取られたままになってしまうと解っていた。

安芸津伊月が扱いづらい女なのは周知の事実だ。

他人に取り入ろうと自分を曲げることはない。ナメられない程度に化粧をするし、殴りはしないが視線の暴力は挨拶代わり。常に一匹狼で取り巻きやヒモの男は作らない。口説いてやろう、もしくは虐めてやろう、そういう気持ちで迂闊に関わった者は怪我をする。

あの親あってのあの子と思われるのも好都合。

当初の目論見(もくろみ)通り、校内においてアウトローとしての伊月像は完成しつつあった。

ただ、ちょっとやり過ぎた部分もあったのだろう。

心の面倒を見るとかで、週一のカウンセリングを受けていた。それすらも面倒臭くなったわたしが粗野に応じたせいか、先週は予定が流れて、てっきりもう必要なくなったのだと思っていた。

間違ったことを言ったつもりはない。

つらくもない、つらいと思いたくもないことを、本当はつらかろうと押し付けられるのが心外でキレただけ。不幸な体験を他人に代弁されるほど気持ちの悪いことはない。

カウンセラーに言わせれば、不良になるのは過去のつらい体験から解放されたいと願いつつも方法を誤って空回りするためで、本来温厚なわたしの本意ではない行動だという。

一体全体わたしの何を知っているんだ、と反駁(はんばく)すれば相手の思う壺だ。

「他人には想像も付かない大変な苦労だったでしょう。どうか話して楽になりなさい」

そして悔い改めなさいと神父のように説教するの

がお決まりのパターンだった。

「アンタの偽善の押し売りに払う時間はないの。帰ってよ、二度と来ないでいいから」

放課後の居残りを避けるため五時限目の枠を潰して受けていたが、それさえなければ午後からフケることができる。別に心はなんともないのだから拘束される数十分が勿体ないと感じた。

翌日、診断書が付かないと留年の基準が厳しくなるぞ、と担任から忠告を受けた。それはちょっとまずいかなと日和っていたところ、約半月ぶりにカウンセリングの呼び出しを受けた。

今更面倒だという気持ちが拭えずにすっぽかそうとしたが、次は別の先生だから今度は本物のお医者様だからと必死に繋ぎ止められた。

今度は、と言うなら先日までわたしを担当していたあの肥満体のオバハンはなんだったのか、医者ですらなかったのか。そんな猜疑(さいぎ)が浮かんで、新しい先生とやらに一層警戒する気持ちは強まっていた。

初対面でガツンとやり込めて、初回お試しのみでお引き取り願う構えだった。

とは言うものの。追い出した側として文句も言えないが、大病院の心療内科に、わたしのほうから足を運ばねばならないとは思わなかった。

(完全にアウェイじゃない)

お引き取り願うどころか敵の城に単騎で乗り込むのだ。

ここでは校内のキャラ設定が通用しない。引き継ぎでカルテは渡っているかもしれないが、あまり派手なことは起こせないだろう。油断すると借りて来た猫のように縮こまって、まだまだ付け焼き刃だなと苦笑したりして。

「次の方どうぞ」

思わず「あ、はい」といつかのチビのように応えそうになったが堪える。後ろから首根っこを引っ掴まれた猫のような顔になっていたと思う。仮に見られていたら不覚だ。

一呼吸して立ち上がると、無言で引き戸を開けて診察椅子へ。

微かにエタノールの匂いがして紫月を連想した。彼女は相当念入りにクリーニングしているのか、仕事帰りでもほとんどそんな匂いはしないのだが。それでも空気が近かった。

部屋には女医一人で、大股で入室したわたしが椅子に座るまでカルテにペンを走らせていた。

「……」

最初に彼女を見た時点から続いていた違和は、間近に座って確信に変わる。

座っているのであくまで推測だが、彼女は相当な長身だ。

ロングスカートから出た、机の下に伸ばした脚は暗闇に吸い込まれて先が見えない。わたしも低いほうではないが、座ったときに上目がちに話す相手はそうそういない。ついとカルテから視線を外し、わたしの側の肩を軽く引くようにするだけで、もう向かい合っていると感じるほどだった。

ぱっと見は二十代に見えるが、尋常ならざる落ち着きようにギャップを感じる。

「御機嫌よう。今日の加減は如何かな、伊月君」

初対面なのに名乗りもしないのか。胸のネームプレートを見れば判ることだが、旧友のように馴れ馴れしい……そう意味付けられたに過ぎない形式的な挨拶だった。

同時に、どうしても質問したい感情が湧いて、彼女の問いを無視して訊き返した。

「お姉さんベジタリアン？　お肉食べれる？　刺身はネギトロしか食べられないほう？」

「ほう。まるで五歳児のようなことを訊く」

そういうつもりはなかったが、言われてみればそういう問い方になっていたのはあのバカチビの悪影響かもしれない。

「誓って言うが。私は刺身も食べない正真正銘のベジタリアンだ」

やっぱりね、と納得。

部屋に入ってすぐ紫月を連想したのは、匂いではなく彼女の雰囲気が似ているからだったようだ。わたしに灸を据えたい担任の策略だとしたら許せないが、一番厄介な相手に当たってしまったのを後悔する。

「で、お姉さんの名前は？」

「望月茉莉（もちづきまり）と言う」

「じゃ、マリーで決定。よろしくマリー。名前も聞いたし、今日はこの辺で」

「まあ待ちたまえ」

適当にあだ名を付けてお開きにしたかったがダメらしい。

相性が悪いのは自覚していた。紫月と同じタイプと判断するなら、この手の人種は相手がボロを出すのを探っているだけで、本質的には会話が成立しない。正確には、純粋に損得で応答していて、相手が一方的に減点を積み重ねていくだけだ。

以前のカウンセラーよりはマシだが、こちらの意思とは無関係に問診票を書かされるような、そんな誘導尋問は御免だった。

「ふむ」

思案とも取れるそんな溜息をして、なんの前置きもなく茉莉は問う。

「お母様のことが嫌いかな」

なんでそうなるのよ、と訊きたかったが顔に出ていただろうか。

「いやなに。私の好き嫌いを知って警戒していたのでね。人並みには報道を見聞きしている。君のお母様のことも、大体は」

ニュースで見て知っていたというのは尤もらしい理由だ。わたしのことを事前に調べ尽くして知っていたという線もある。

この女に限って言えばどちらも違うだろうが。

母の紫月は監察医である。その事実を軸として、わたしの質問と反応からそういう推論に至る程度に

は、職業的に下種の勘繰りを磨いているのだろうと察した。

「それで。八雲伊月君は」

「安芸津よ」

「これは失敬」

今のも、あえて失言して緊張を解そうとしているわけではない。わたしが八雲に対してどのような感情を抱いているか、それとなく探りを入れて答え合わせをしているのだろう。

そういう神経衰弱みたいな遣り取りは苦手というか、正直に言って疲れるのが本音だ。

「肩肘を張る必要はない。私を母と思って話すといい」

「だから、嫌いだって言ったでしょ？　……あ」

「母は嫌いと」

結局こういうふうに乗せられる辺り、やっぱり大人には敵わないと自覚する。

まあ、こちらは診断書もといサボりの免罪符さえいただければ万事ＯＫなのだ。不本意ながら、下手に逆らうより適当に答えて、さっさと済ませてしまうのが楽だと思った。

前任を信用していないのか、聞き覚えのある質問を幾つも寄越して、その度にカルテに書き込みを入れながら診察が続く。

あまりにも退屈なので、茉莉の横顔を見ながら取り留めのない考えに耽る。

彼女にとっては初期設定であろう、如何にも理知的で小難しい表情。目元はさほど鋭くないが隙もないからだろう、色気は微塵も感じられない。唇は薄く化粧も薄い。新品のようなシャツと、厚手で透けない紺のスカートに、裾が床に触れそうな長さの白衣を羽織る。

お世辞ではなく美人だなと思った。

「マリーって二十代？　三十路……じゃないわよね」

「答える必要のない質問だが。まあ、君の察しの通りだ」

二十代後半、三十にはまだ遠いという辺りだろうか。口調こそ定年前の理屈っぽい男性のようだが、衰えを感じない外見はやはりそのくらいに見えた。

「さて」

質問が一通り済んだのか、それとも本題はここからか。

重そうな材質の万年筆を置いて、初めて彼女は椅子ごと向き直る。

「これは私見になるが。お山の学園のほうが、君には似合いだったと思う」

「あそこはお嬢様が入る刑務所でしょ」

「編入試験は受けたのだろう」

「別に。滑り止めみたいなもんだし」

ふむ、と茉莉は相変わらずの無表情でわたしを窺う。何も包み隠すことはなかったが、引っ掛かることでもあるのだろうか。

片手でパラパラとカルテを捲って……何かを確認しているようで、実際には今思い出したというポーズでしかないのだろう……彼女は再確認するように訊いた。

「君の姉、海月君はあそこの卒業生だった」

「姉と転校先になんの関係があるのよ」

「君と同じく、彼女も途中から学園に転入している。ちょうど失踪直後に、だ」

それは初耳だった。

そもそも、海月がどの学校を卒業したかという話も報道で知ったのだ。

言われてみれば、例の学園は基本的に全寮制で、だとすると幼少期に二人で過ごした記憶は薄かったはずだろう。それ以前に、海月が失踪前と同じ学校に通っていたら、あの男に見つかって連れ戻されていたに違いない。立地や校風からムショみたいな場所だと感じたが、逃げ込む先としては最適だったということか。

「でも、わたしは姉みたいな優等生じゃないし。ママがどちらか選べって言うから、今の学校のほうが

性に合ってる気がしただけ」

海月の話が聞けたのはラッキーだったので、内心感謝しつつ素直に答えておく。

しかし茉莉は、どこか怪訝な顔をして、わたしの言葉を拾い直して検めるように訊いた。

「君の母……安芸津紫月は、君があの学園に進学することを許可したと」

「許可も何も。蹴ったのはわたしのほうよ」

なるほど、と。そう相槌を打つ茉莉は、わたしが紫月に転校先を伝えたときと全く同じ顔だ。ついでに言えば、初めて彼女が表情らしきものを見せた瞬間でもあった。

流石に子供のわたしでも引っ掛かる。

茉莉は、紫月は、何を知っていて——何を嗤っているのか。

「その顔ムカつく。知ってることがあるなら言えば？　て言うか、全部白状しなさいよ」

「いやはや。君のお母様もつくづく優しい人だと感銘を受けただけだ。君は、ほかでもない自分自身で己が道を選ぶ権利を得た。どうか迷わず、そして怯まず前進したまえ」

「言われなくてもそうしてる」

茉莉の台詞は本心だろうか皮肉だろうか。

絶対後者だろうと思ったけれど、背中を押されるのは悪い気がしない。

不良になろうが自分で選択した道なら突き進めばいい……とまでは言っていないが。この女はわたしを更生させるつもりがないらしい。そう判ったのは収穫だった。

「じゃあね、マリー。話せて楽しかったわ」

話は終わりだろうと悟って席を立つ。

茉莉も無理に引き留めようとはしない。ただ、追伸のようにわたしの背に言葉を投げた。

「海月君のことは早めに忘れるといい。それは似合わぬ感傷だ」

立ち止まったが振り返りはしない。

今ここで舞い戻ったら、せっかくの計画が台無しになってしまうと予感していたから。

「君が君であろうとするほど、八雲伊月は消えていく。これからの君――安芸津伊月に必要な存在は、海月君ではないと思うが。どうかな」

「……そうかもね」

それでも、海月はわたしにとって特別な人よ。

そんな台詞が口を突く前に診察室を出てしまう。

茉莉の指摘する矛盾には気付いていた。

姉への想いが安芸津海月を曇らせる。悪ぶるほどに悪びれて、彼女はわたしを許してくれるだろうか、夜な夜なそんなことに怯えている。

海月の好きな曲を持ち歩くことも。

海月以外愛さないと決めたことも。

いつか再会したとき、胸を張って自慢するため勝手に決めたルールでしかなくて。もしも彼女があの約束を覚えていなかったら。

八雲伊月を生かした願いが、安芸津伊月を殺す呪いになりはしないだろうか。

「恋人でも作ろっかな。お姉ちゃんそっくりの、ワンピースの似合う可愛い女の子」

わざとらしく口に出すだけで胸が傷んだ。

わたしの中の八雲伊月がすり減っていく。

今のわたしを海月は愛してくれないかも。

そんなことは百も承知だった。男子三日会わずんば……とか言うけれど、女の子なんて覚悟を決めて三秒もすれば別人になる生き物だ。

でも、だからこそ、彼女が惚れ直すくらい安芸津伊月はいい女になろうと戦っている。

それまでは乙女のまま、キスだってさせない。

〝私以外の女の子にならないで〟

海月らしい慮(おもんぱか)った言い方だった。とは言え、直球に言われたら流石にちょっと引いていたかもしれないので、そのくらいがちょうどいいのかも。

再会の暁にはほんの少し自己流にアレンジして。

同じ言葉でプロポーズしようと決めていた。

「……はあ、最悪」

玄関まで出てがっくり肩を落とす。

あくまで逆出張カウンセリングのため、病院の受付は要らなかった。処方箋もないので早足で外来の待合室を抜けて病院を出ると、そのまま繁華街へと向かうつもりでいた。

夜遊びと言うか、刺激が欲しくてちょっとしたバイトをやっているので、その下準備のようなものだ。気が早いが、冬の新作コスメが出る季節なので下見に行こうという次第。無論、バイトというのは海月との誓いを破るようなそれでは……おそらくない。

十月も末だというのに、今日は朝からじめじめと蒸していた。孤軍奮闘してみたものの、衣替えの波に飲まれてすっかり長袖だったが、要らないだろうと上着は置いてきていた。

そんな日に限ってというか、むしろ前兆だったのだろう。

小一時間前まで曇り空だったのが、すっかり土砂降りの雨だ。体感的にも急にひんやりしてきて、濡れ鼠になると風邪を引くだろう。残念ながら傘は持ってきていない。おまけに今日は透けやすい黒の下着だった。雨の中をダッシュして、歩く猥褻物になるのは避けたい。

近くにコンビニはあっただろうか、病院の売店にも売っている気はするが。

“傘なんてパクっちゃえばいいのに。そういうとこ、やっぱりいい子ちゃんっスよね〟

アカネと出会ってすぐの頃。夕立に見舞われて相合い傘を差して帰った日、そんなふうにからかわれたのを思い出した。元はと言えば彼女が忘れて、わたしの傘に入れてやったのに失礼なことを言う奴だと呆れたのを覚えている。

(げ。学校に財布忘れた)

ダブルで不運が重なってはやむを得まい。

アカネに倣って悪い子ちゃんになるしかないようだ。流石に傘くらいで逮捕はないだろうと思う、思

うけど……と逡巡する自分が少し情けない。
ただ、二度あることは三度あるというか。
最低なことに、傘を漁ろうとするわたしを咎めるように、じいっとこちらを見つめてくる影があった。現行犯だと言い逃れはできない。とは言え、相手はお巡りさんではなかった。
玄関から伸びる屋根付きの乗り場には小型タクシーが何台も着けられていて、傘を忘れたであろうお年寄りが次々と吸い込まれていた。それらの向こう、来院者の一般車両が通行する有人ゲートのそばで、黒の傘を差して微動だにせず棒立ちする女がいる。一瞬疑ったが、マスコミの人間ではなさそうだ。格好もそうだが気配には刺すような緊張感がある。話を聞きたいなら、そんなふうに殺気を垂れ流す理由がない。
目が合って数秒。わたしが感付いたのを知って、こちらへと進んでくる。
彼女とは関わるべきではないと直感した。
激しく振る雨がそう思わせるだけか。
ともすれば、あの夜あの男に射竦(いすく)められた感覚が甦って、身動きできなくなりそうだ。そうなる前に先手を打って、雨の中へと一歩を踏み出していた。
わたしに何か用があるのは分かっていた。
だとしても、ずぶ濡れで振り返らず突き進む者を止められやしないだろう。一直線に向かってくる女との距離が縮まって、それでも視線は自然とぶつからず、すれ違う。
その刹那、不規則に頭と肩を打つ粒が消えた。
世界から音が失われたような錯覚に振り返る。
「明道寺(みょうどうじ)の者だ。安芸津海月について話がある」
真横に並んだ彼女は、自分の傘をずいとわたしの頭上に差し出して。少年のように低く律した声で、引き絞った弓を射るかのようにそう言った。
ばらばらという音が頭の上で再開される。
「奇遇ね。わたしも同じ話がしたかったところ」
それは単なる気紛れだったかもしれない。あるい

は彼女が、わたしと似た年頃の、水も滴るいい女だったからかもしれない。

本当は、姉の名前に抗えなかっただけ。

もしもこの女の求めに応じなかったら、わたしは。

母譲りの女の勘が、そう耳元で囁いていた。